

大鳥圭介関係史料について

長佐古 美奈子

大鳥圭介関係史料受入の経緯

大鳥圭介関係史料は平成六年度（一九九四）に大鳥圭介の孫にあたる大鳥蘭三郎氏（元慶応大学医学部教授）より、当館に寄贈されたものである。当時当館の助手であった桑尾光太郎氏（現学習院アーカイブズ）によれば、寄贈の経緯は以下のようなものであった。

「大鳥圭介の孫にあたる蘭三郎氏が、圭介の伝記を執筆しようとして蒐集した史料。大鳥家から散逸した史料を、蘭三郎氏が再び買い戻した。ところが蘭三郎氏が病氣となったため、明德出版の村田一夫氏を通じて史料の寄贈先を探すことになった。そこで村田氏と知り合いであった学習院女子短期大学高橋新太郎教授（元当館客員研究員）のもとに打診があり、圭介が院長をつとめた学習院ならば、寄贈先として適当と蘭三郎氏が判断し、平成七年三月末に書類交換が行われ、当館の所蔵となった。」

その後、当館の整理・調査担当者が何度も交替し、本目録の完成、史料の内容に関する調査、翻刻などがなされないまま一五年余りが経過してしまつた。

この間、『幕末・明治の古写真』（平成一七年発行）に「男爵大鳥圭介史料（大鳥圭介葬儀写真）」を、『ミュージアムレター』No.13（平成二二年五月発行）に「函館大戦争之図」を「明治の視覚革命——工部美術学校と学習院」（平成二三年四月発行）に「大鳥圭介写真」を掲載した。

また大鳥圭介の出身地である兵庫県赤穂郡上郡町発行の『上郡の古文書

大鳥圭介書簡集』（平成一〇年）に書簡の一部を掲載、大鳥圭介の妹於勝の子孫にあたる福本龍氏が『われ徒死せず』（平成一六年 国書刊行会）、『明治五年・六年大鳥圭介の英・米産業視察日記』（平成一九年 国書刊行会）に日記を掲載など、ゆかりの深いところには未整理の状態の史料を利用していたのだが、各所よりの多くの問い合わせには応えられずにいたことを、まず深謝したい。

今年度より、昭和会館委託研究「男爵叙爵の系統別研究」の成果の一部として「大鳥圭介関係史料」を三年間にわたり順次掲載発表する。今年度は書簡翻刻（明治一九年から三〇年部分）、「南柯紀行」の翻刻（慶応四年四月・閏四月部分）を掲載する。大鳥圭介関係史料の全目録については三年後に掲載予定である。

大鳥圭介の事績と当館所蔵史料の連関について

大鳥圭介の事績については大鳥圭介の自筆と思われる「大鳥家系図・大鳥家譜」を基に記述した。そのため従来知られている年号と相違がある場合がある。当該史料の記述は慶応四年（一八六八）四月一日で終わっているため、それ以降、ならびに不明部分は「大鳥蘭三郎祖父圭介の自伝に就いて」（『日本医事新報』八六五 昭和一四年）福本龍『われ徒死せず』（平成一六年 国書刊行会）『明治五年・六年大鳥圭介の英・米産業視察日記』（平成一九年 国書刊行会）を参考として記した。また、それぞれの年代に対応する当館所蔵史料を「」で示した。



[幕臣時の大鳥圭介写真 (複製)]

大鳥圭介（以下大鳥と記す）は天保三年（一八三二）、播磨国赤穂郡細念村（現兵庫県赤穂郡上郡町）の村医師大鳥直輔の長男として生まれた。幼名は慶太郎。号は如楓。幼少期より祖父大鳥純平に漢学の教えを受けて、弘化二年（一八四五）には数え一四歳で岡山藩校閑谷学校に入学。同校で漢学、儒学などを学ぶ。この頃は医家を継ぐことより儒家を目指していたが、父の希望により卒業後は赤穂の蘭方医中島意庵のもとで医学を学ぶことになった。ここで初めて解体新書などを目にし、西洋医学の先端性にふれる。

嘉永五年（一八五二）大坂、緒方洪庵の適塾で蘭学と西洋医学を学んだ後、安政元年（一八五四）江戸に出、蘭方医坪井信道の女婿大木忠益開催の坪井塾で塾頭となる。坪井塾には多くの物理学、西洋式兵学などの原書があり、これらに接した大鳥の関心は医学より軍学、工学に移るようになった。「地球儀用法」の一丁目には挾込の丁があり、そこには「此書ハ和蘭人某ノ原著ニテ安政四年余カ二十六歳ノ頃飯倉四辻伊勢屋宇兵衛ノ囑ニ応シテ翻訳セシモノナリ伊勢屋ハ煙草商ナリシカ維新後間モナク断絶シテ今ハ跡ヲ留メス四十年前ノ事ナレハ余モ亦幾ト其拳アリシヲ失忘セシニ此頃宇兵衛末子杉本某之ヲ原本ト共ニ携来リテ一覽セシム余執リテ反覆校閲懐旧ノ感ニ勝エス乃一本ヲ謄写シテ存蔵ス但余カ壯年ノ時前後蘭英佛等ノ書ヲ訳セシモノ実ニ勲カラス本書ハ其最初ニ成リシモノナリ 当時余ハ芝浜松町一丁目大木忠益氏 即其後改名セラシ坪井芳洲先生ノ次郎子ノ実父 ノ塾ニ在リテ従事セシナリ 于豈明治二十九年五月 圭介手識 印」とあり、大鳥

が初めて翻訳したものであることがわかる。安政四年十一月知人であった服部元彰の紹介で尼崎藩に八人扶持で出仕。

安政五年、江川塾の江川英敏の推挙により、御鉄砲方出役として幕府に出仕、江川邸内に移住する。この時期、自らが考案した日本最初の活字「大鳥活字」による印刷で『砲科新編』などを翻訳出版している。当館史料には万延元年（一八六〇）発刊の『築城典刑（マイクロフィルム紙焼き、原蔵は東京大学）』『万国綜覧』が収蔵されている。同時期、中浜万次郎が江川塾に英語などの教授として招かれていたことから、細川潤次郎、箕作貞一（元甫）、榎本釜次郎（武揚）らと共に、中浜万次郎から英語を学ぶ。安政六年冬に上郡に帰郷する。同年、矢島みちと結婚。その後文久二年（一八六二）には徳島藩に出仕する。

文久四年、陸軍取調方出役、開成所教授を兼務。横浜にてヘボンに英語を学ぶ。元治二年（一八六五）『山砲演武』を出版。慶応元年（一八六六）長男富士太郎誕生。

慶応二年富士見御宝蔵番格として正式に幕臣に取り立てられる。俸禄は五〇俵三人扶持、フランス軍事顧問団のブリュネとともに幕府陸軍（伝習隊）の訓練にあたった。「蘭人直伝軍鼓譜点」はこの頃のものと思われる。さらに歩兵差図役頭取勤方を命ぜられ、慶応四年一月歩兵頭、三千石取となる。

慶応四年一月三日、大坂より帰還した將軍徳川慶喜と江戸城にて面談し、交戦継続を強硬に主張する。二月二十八日歩兵奉行に昇進。同時期、家族を江戸から下総佐倉へ脱出させる。四月二日江戸開城と同日江戸を脱走。本所、市川を経て、伝習隊を率いて小山、宇都宮、今市、藤原、会津を転戦する（この間の動向については二五頁よりの「南柯紀行」翻刻にて詳細を知ることが出来る）。仙台にて榎本武揚、ブリュネと合流して蝦夷に渡り、箱館では「陸軍奉行」と称する。箱館戦争では土方歳三、荒井郁之助、松平太郎などと共に戦った。明治期の作品となるが「函館大戦争之図（三枚一組錦絵）」にはその活躍が描かれている。しかし徐々に追い詰められ、明治二年（一八六九）

五月一八日五稜郭で降伏したのち、東京へ護送され、幕臣時代に自ら設計した牢である軍務局糺問所へ投獄された。そこで二年半の牢生活を送る。この江戸脱走から箱館戦争敗戦、獄中生活について綴ったものが「南柯紀行」「流落日記（マイクロフィルム紙焼き、原蔵国会図書館）」である。

明治五年一月八日に黒田清隆の願いにより特赦出獄、直後より黒田が次官をつとめる開拓使の五等出仕として明治政府に採用され、翌年には大蔵少輔吉田清成の外債募集の随行者として、アメリカ、イギリスに派遣される。同地で石炭、石油などに関する調査検分をおこなった。この間の日記は当館収蔵である。「イギリス・アメリカ滞在記録」明治五年八月二三日～翌年一〇月一四日」イギリスにて岩倉使節団としてに滞在していた伊藤博文、山尾庸三と知り合う。

明治七年帰国。北海道開拓使五等出仕専任となり、北海道出張を命じられ、ホロム井石炭山実地検査開採方取調にあたった。ここでの調査内容をまとめたものが「石炭編」「山油編」「木醋編」である。これらは明治一三年に開拓使より「石炭編」「山油編」「酢酸編」「阿膠編」として刊行された。明治八年一月、西洋近代産業を知る人材として工部省入りし、川路聖謨の孫、川路寛堂とともに暹羅（現在のタイ）へ赴いている。その時の記録は「暹羅紀行」「暹羅紀行図」として刊行されている。帰国後、工学権頭兼製作頭就任。内務省勸業寮四等出仕。九年には内国勸業博覧会御用掛兼任。

同年、工部省工学寮中に伊藤博文、山尾庸三、大島の尽力により美術学校が設立された。翌一〇年には工部美術学校となり、初代校長には大島が就任した。この年の工部美術学校学生は三九名。蕃所調所画学出役であった川上冬崖の日本画塾から生徒が入学しているほか、川路聖謨の息子新吉郎や、大島の娘ひななども入学している。さらに工学寮が工部大学校となり、大島は明治一五年校長に任命される。この年荒井郁之助、工部大学校卒業生高峰讓吉達と「工業新報」を発刊する。

明治一四年工部技監に昇進。東京学士会院会員。明治一五年には日本初のダム建築技術書「堰堤築法新按」を翻訳出版している。この間明治一一年に妻みちが三九歳で死去したため、明治一四年には青山墓地を購入した。

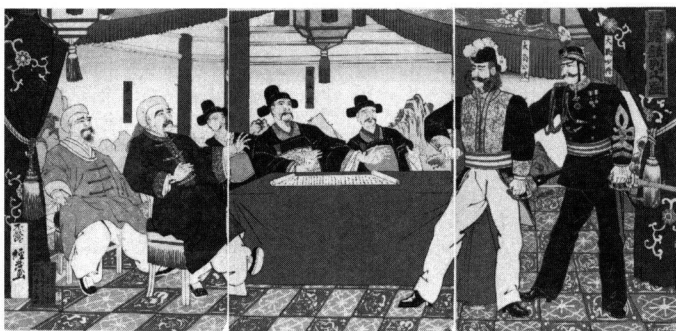
「青山墓地券（二〇坪・地価金四〇円）」

明治一六年工部美術学校が廃止され、さらに同一八年内閣制度発足に伴い、工部省が廃され、工部大学校は文部省下の帝国大学工科大学となった。大島は同一九年、第三代学習院長へと転任する。学習院は同一〇年に華族子女のための教育機関として神田錦町において創立したが、校舎を火事で焼失し移転先を模索していたところであった。大島の院長就任に伴い、大島の尽力により工部大学校跡地への校舎移転がなされる。同一〇年華族女学校長兼任となるが、翌年七月一三日学習院長兼華族女学校長を辞任。辞任の理由は定かではない。この間同一二年三月二十九日～同一二年二月一日に東北・茨城など旅行した記録「東北・茨城旅行記録」が残されている。明治一二年六月三日に駐清国特命全権公使に任命され、一月に着任。

このときに万里の長城を見聞しており、その際の記録が「長城游記（マイクロフィルム紙焼き、原蔵国会図書館）」として残されている。清国着任までの間に北海道へ旅行し「北海道旅行記録、七月一四日～八月一日」を残している。

「藏輝論」は明治一四年八月一三日付けで「日本国駐清公使館用箋」に記されており、明治一五年五月の「第四呂宋島紀事」と共に国会図書館蔵でマイクロフィルムとなっている。

明治一六年朝鮮公使を兼任し、翌二七年六月には朝鮮へ赴任。日清戦争開戦直前、東学党の乱時には外務省の命により日本へ帰国していたが、代理公使杉村濬より、鎮圧のために朝鮮政府が清国に拳兵を依頼した、との打電を受け、兵を連れ京城へ入城し、



【日清韓談判之図】



〔晩年の大鳥圭介写真〕

その後の処理にあたる。『日清韓談判之図』には、大鳥公使と大鳥義昌少将の姿が描かれている。八月一日に日清戦争開戦、その後一〇月二日、公使解任。帰国後の同年二月二〇日枢密顧問官に転じる。

明治三三年五月九日、多年の功により男爵に叙せられた。この男爵叙爵の経緯については岩壁義光氏による「旧幕臣系男爵の授爵について―宮内公文書館所蔵『授爵録』の分析を通じて―」四五頁を参照していただきたい。明治三四年には第五回内国勸業博覧会審査総長に任じられる。大鳥は明治一〇年の第一回内国産業博覧会御用係、第二回内国産業博覧会御用係審査係長も務めており、産業技術の躍進のための仕事に意欲的に取り組んでいる。

朝鮮公使解任以降は時間的な余裕が出来たのか（明治二八年には国府津別荘を入手し主にそこに居住）、その期間のみ史料が残存したのかは定かではないが、明治二九年から四二年までの「書簡」、明治三二年から明治四三年までの「日記」が残されている。特に二九年から三三年までの長男富士太郎に宛てた書簡は、従前一部を『上郡の古文書 大鳥圭介書簡集』に掲載したが、今回の翻刻は未公表のものも多く含まれる（大鳥圭介書簡その一参照）。さらに日記では、晩年の大鳥圭介の様子が窺える。

明治四四年、食道癌のため神奈川県府津の別荘において死去。享年七八。その「葬儀写真アルバム」が残されており『幕末・明治の古写真』中に「男爵大鳥圭介史料（大鳥圭介葬儀写真）」として公表している。

大鳥圭介関連史料の所在について

大鳥圭介の関連史料は大きな群としては国立国会図書館憲政資料室に「大鳥圭介関係文書」二二点、兵庫県立歴史博物館に書簡一一〇通と掛軸

など数点が所蔵されている。『上郡の古文書 大鳥圭介書簡集』（平成一〇年 上郡町史編纂室）には兵庫県立歴史博物館と当館史料の他、個人蔵の書簡四五通が掲載されている。兵庫県立歴史博物館の書簡は福本龍氏寄贈のものである。さらに大鳥圭介の生誕地である兵庫県赤穂郡上郡町のいきいき交流ふれあい館にも掛軸など数点が所蔵されている。

大鳥圭介及び長男富士太郎の蔵書は、天理図書館に昭和四年収集の「大鳥文庫」約二五〇冊として収蔵されている（『天理図書館四〇年史』昭和五〇年 天理図書館）。さらに台湾大学にも大鳥圭介、富士太郎旧蔵の図書八〇九種一一三〇冊が収蔵されている（『國立臺灣大學圖書館藏大鳥文庫目録／臺灣大學特藏文庫目録』二〇〇七年 國立臺灣大學圖書館）。これは昭和四年に当時の台北帝国大学が購入したものである。大鳥圭介の長男富士太郎は外交官として一時期台湾総督府に勤務しており、また二男次郎は台湾総督府医学専門学校教授であった。

この他、平成五年（一九九三）当館発行の『旧華族家史料所在調査報告書』では大鳥圭介関係資料の所在情報として、市立函館図書館に書簡・書籍など八点、市立函館博物館五稜郭分館に掛軸等六点、東京都立中央図書館に書簡二通、東京大学史料編纂所の維新史料中に書簡二通の所在情報に掲載されている。その他、学習院大学図書館にも大鳥の著作が三冊所在することになっているが、現在のOPAC検索では確認できていない。

他家史料中にも大鳥圭介関係史料の所在が確認できる。『吉田清成関係文書』書翰編（京都大学史料叢書一〇 平成五年京都大学）には大鳥圭介から吉田清成に宛てた書簡三三三通が掲載されている。『黒田清隆関係文書』（鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵）（一九九三年 北泉社）中には明治二八年大鳥圭介差出書簡が一通、などがある。

国書総目録では「地球儀用法」「築城典刑」「日本小史」「砲科新論」「歩兵操法」「歩兵練法」「野戦用務」の所蔵が確認できる。